

## 「みことばに生きる教会」

使徒 20:28～32

キリストを信じるということはすなわちキリストのことばを信じることです。教会とは何かと言う時も聖書のことばが教会をどのようなものと教えているかということに最大の価値を置きます。聖書のみことばをぬきに信仰生活や教会生活はありえません。みことばをどのように理解し、従うかということが個人の信仰と教会を成長させます。今日の説教題は「みことばに生きる教会」です。このことばを2024年の教会指針とするようにと導かれました。詳しくは総会資料に掲載したいと思いますが今日は教会が成長するためにみことばが何を教えているのかについて考えてゆきたいと思います。

## 1)教会は神様のもの

最初の28節に、とても大事な、根本的なことが語られています。「あなたがたは自分自身と群れの全体に気を配りなさい。神がご自分の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、聖霊はあなたがたを群れの監督にお立てになったのです。」。この教えはまさに、教会の指導者、監督者として任命された長老たちに対して心に留めておくべきことが語られていますが、そのこと以上に全ての信仰者がしっかりと捉えておくべきである、「教会とは何であるか」ということが明確に語られています。「神がご自分の血をもって買い取られた神の教会」という言葉がそれです。教会というのは建物のことではなくて、主イエス・キリストを信じ、洗礼を受けて礼拝を守っている者たちの群れですが、その教会とは、神様が、御子イエス・キリストの血によって御自分のものとなさった群れです。つまり教会という群れは、神様のものであり、神様のご意志、み心によって存在しているのです。私の罪の罰を十字架においてイエス様が死んでくださることによって私の代わりに受けてくださった。この神様の救いのみ業によって私たちは神様のものとなりました。私たちが神様を、その独り子イエス・キリストを信じる決断をして洗礼を受けようと思うよりも前に、神様はこのみ業によって私たちをご自分のものとして下さっていたのです。ですから、教会を成り立たせているのは、私たちの思いではないし、私たちの信仰ですらありません。神様ご自身のみ心が、独り子をさえ与えて下さる愛が、神様のものである教会という群れを成り立たせ、支えているのです。

私たちは、教会を誰のものだと思っているのでしょうか。教会は牧師や長く教会にいる人のもの、と思っている人がいるかもしれません。その他の人たちはお客さんのようなものだという感覚を持つこともあり得るでしょう。それに対して、教会は一部の長老や執事のものではなくて、集うみんなのものだ。だからみんなで教会を守り、盛り上げていかなければならないのだ、という思いを持つこともあるかもしれません。一人一人が教会員としての自覚を持つ、という点では、このような積極的な思いは望ましいことです。しかしそのどれも根本的には間違いです。教会は、牧師のものでも、役員のものでも、教会員一人一人のものでもありません。それは神様のものです。教会は神様のものなのですから、そこでは牧師であれ、伝道師、役員であれ教会員であれ、人間の思いや言葉が支配するのではなく、神様のみ心、み言葉こそが支配しなければならないのです。ですから私たちは、自分の思いや言葉よりも、神様のみ心とみ言葉を大切に生きていくのです。ですからたとえば自分にとって居心地の良い教会が神様の御心になつた教会とは限らないということです。私の思いと神のみ心が違っているということが往々にしてあることです。「群盲象を評す」とあるようにとかく私たちは自分の思いでイメージしている教会が最も素晴らしい教会だと思いこんでいる節があります。みことばからより正しく教会への理解を深めたいと思います。

## 2)神は教会のために人を立てておられる

28節は、この「教会は神様のものである」という根本的なことを前提として、教会の指導者たちのあり方を教えています。パウロが語っている28節から、二つのことを教えられます。一つは、教会の指導者たちは、聖霊によって任命された者たちであるということです。「聖霊はあなたがたを群れの監督にお立てになったのです。」。神様はご自分のものである教会を指導させるために、聖霊によって人間をお立てになりました。教会は神様のものであり、神様のみがご支配なさるのであるから教会に人間の指導者などがい

てはならないと考えることは間違っています。むしろ聖霊は教会に指導者を任命し、人間による指導体制という秩序を立てています。教会に牧師が立てられる、ということを私たちはそのように理解すべきなのです。今年には野々山伝道師が正教師試験を受ける年です。試験自体は人間が作成したものです。そして採点基準を超えれば合格し、正教師となります。それはまた私たちの群れにおいて役員が任命されることにも言えます。今年がそうですが教会総会において私たちは役員を選挙をします。これも人間の投票によって選出されます。しかしそこで選出されることに、私たちは神様がその人を役員として立てようとしておられる、そのみ心を受け止める必要があります。牧師も、伝道師、役員もこのように聖霊によって任命された指導者です。その指導の下に、神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会は歩むのです。「聖霊はあなたがたを群れの監督にお立てになったのです。」というのはそういうことです。

それゆえにこそ、ここで語られている第二のことが大事です。それは、聖霊によって任命された指導者は自分自身と群れ全体とに気を配らなければならないということです。つまり、聖霊によって任命された指導者の務めと責任が重大だということです。指導者の務めとして、「神の教会を牧させる」ということが語られています。この「牧させる」というところは、別の訳では「世話をする」「心配りをする」と訳されています。聖霊によって任命された指導者は、教会を、自分の好き勝手に支配したり、あやつったりしてはならないのです。むしろ、羊飼いが羊の群れの世話をするように、養い、守り、導くのです。世の中と違って教会の指導者は教会に仕えるという言い方をします。指導者は、神様から預けられた群れを、神様のみ心に従って世話をします。そうでないと、その人の指導は、人間の思いによる指導となってしまう、教会において神様のみ心やみ言葉よりも人間の思いや言葉が優先されることになってしまいます。ただ「世話をする」といっても生活の様々なことの面倒を見ることではありません。教会の群れ全体が、本当にみ言葉の支配の下で歩んでいるか、み言葉よりも人間の思いや言葉が支配してしまっていないか、そのことにいつも気を配っていることが求められているのです。

パウロが、エペソ教会の長老たちにこれらのことをどうしても語っておきたいと思ったのは、教会が実際にしばしば、み言葉のご支配から離れ去り、人間の支配に陥っていくということを彼がよく知っていたからです。このエペソ教会にも必ずそのようなことが起ると彼は29、30節で語っています。「私が去った後、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、容赦なく群れを荒らし回ります。また、あなたがた自身の中からも、いろいろと曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こってくるでしょう。」。残忍な狼どもが来る、しかも外から入って来るだけでなく、教会の中からも、あなたがたの中からも、そういう者が現れるというのです。そのことはいろいろな仕方で起りますが、最も深刻なのは、「いろいろと曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こってくる」ことです。「自分の方に引き込もうとする」(別の訳では従わせようとする)ということから分かるようにこれは自分の子分を造ろうとすることです。自分を中心とする派閥を造ろうとすることです。そうすると、指導者が教会の群れを荒らす残忍な狼となってしまうのです。「曲がったことを語って」とありますが、たとえ語っている内容は正しいことでも、それによって人間を中心とするグループを作ろうとするなら、その人の言っていることは間違ったこととなり、その指導者は残忍な狼となってしまうのです。

このようなことが起らないためにはどうしたらよいのでしょうか？それは31節に記されています。「ですから、私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがた一人ひとりを訓戒し続けてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。」。自分が三年間、エペソの教会で教えてきた、その姿を思い起こし、それに倣えとパウロは言うのです。そのパウロ自身の姿とは、「夜も昼も涙を流して教えてきた」という姿です。この涙は、「自分を全く取るに足りない者と思う」あるいは「自分の過去の人生を見るなら偉そうに何かを意見出来るような者では到底ない。クリスチャンを自分は迫害していたのだから」というまことの謙遜に生きるところに流される涙です。悔し涙ではありません。指導者がこのような謙遜によって群

れを指導するならば、その指導は、教会の人々の罪や欠けや弱さを忍耐し、批判や攻撃によって裁くのではなく、むしろとりなし祈りつつ諭す、という指導となるはずです。夜も昼も涙を流して教えてきたというのはそういうことです。そのような指導者は、人を自分に従わせて派閥を作るようなことはしません。このような指導者は決して残忍な狼になることはないのです。教会が、御子の血によって神様のものとされた神の教会として整えられ、育てられていくためには、立てられた指導者たちが先ず、まことの謙遜を身に付けなければならないのです。そのことを教えるために、パウロは、自分がエペソで三年間教会を指導してきた、その姿を思い起こし、それに倣えと言っているのです。

### 3)教会にみ心なるように

しかしパウロは、それだけでは十分でないことを知っています。パウロの謙遜の模範に倣うよりもっと大事なことがあるということを知っているのです。それが語られているのが32節です。「今私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができるのです。」。パウロは今、エペソ教会の長老たちとの最後の別れに臨んで、彼らとエペソ教会の人々全てを、神とその恵みの言葉とにゆだねています。「この教会を君たちにゆだねるからしっかりやれ」と言っているのではないのです。長老たちをも含めた教会全体を、神様とその恵みのみ言葉とにゆだねているのです。このことこそが、何よりも大切なことだとパウロは考えています。神様とそのみ言葉にゆだねられるなら、教会の歩み、私たちの歩みは、私たちの思いや言葉が支配するのではなく、神様のみ心とみ言葉とが支配し、み言葉によって決定されるものとなります。私たち自身が、またこの群れ全体が、本当に神様とそのみ言葉にゆだねられたものとなること、それが最も大事なことです。そうなっているならば、その群れは、大丈夫です。神様の恵みのみ言葉は、「あなたがたを成長させ」ます。この「成長させる」は、「家を建てる」という意味の言葉ですが、同じ言葉は新約聖書のあちこちで、「教会を造り上げる」という意味で用いられています。神様の恵みのみ言葉が、御子の血によって神様のものとされた教会を築き上げるのです。神様は、御子イエス・キリストの血によって、教会をご自分のものとして下さいました。御子の血によって教会は、聖なる者たちの群れとされているのです。そしてみ言葉は、私たち一人一人をも、その神の教会に招き入れて下さっています。そこで私たちも、聖なる者とされているのです。神様の恵みのみ言葉には、そのような力があります。そのみ言葉にゆだねられて生きるならば、私たち一人一人にも、そのみ言葉の力が発揮されるのです。新しい年、恵みのみことばによって教会の働きが進められるなら教会はどのようなのでしょうか？ 期待して歩んでまいりましょう！